

コミュニティ形成のための故郷の思い出ギャラリー提案

A2201314 高城 和茉

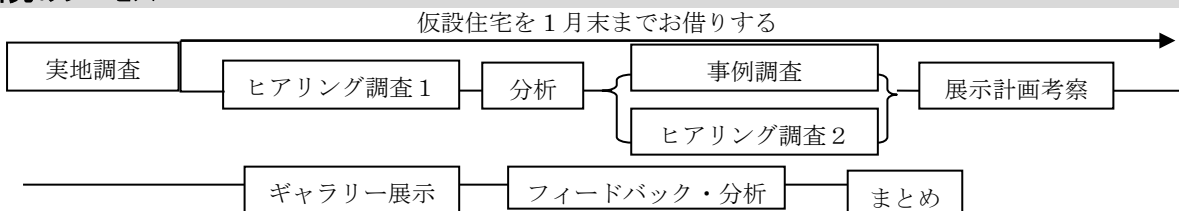
研究の背景および概要

東日本大震災から3年以上が経ったが、現在でも地元に戻ることができない人たちが沢山いる。また、私が現在住んでいる会津地域には仮設住宅が13ヶ所もあり、そのうち例えば、檜葉町の避難者は故郷に戻る目途が立ち始めたが、まだ故郷に戻る目途が立っていない地域もある。なかでも、会津地域で避難生活を送っている大熊町の避難者は故郷に戻る可能性が薄れつつある現状がある。その若年層は仮設住宅から離れ、新しい生活を行う傾向がある一方で、仮設住宅の高齢化が今後ますます問題になると考えられる。さらに、以前から言われてきた仮設住宅におけるコミュニティの低下や避難生活を送っている高齢者の孤立化が深刻化している問題も消えていない。一部の仮設住宅団地では、コミュニティ形成や孤立化の対策を行っているところもあるが、その場所ごとによってさまざまである。このようなことから、震災から3年が経過して一般の関心が薄れている今、改めて仮設住宅におけるコミュニティ形成について研究を行う。

研究の目的

我々がお借りした仮設住宅に住んでいる大熊町の方々、東日本大震災から3年以上経った現在でも、故郷に戻れる目途が立っていない状況である。また若年層は他地域で新しい生活を送っている傾向があり、高齢層の方々も徐々に故郷から離れた復興住宅などに入居が進んでいる。これは、故郷に帰るという意思が時間とともに薄れてきているためだと考えられる。このまま、故郷である大熊町を離れてしまうと、これまで過ごしてきた故郷の生活や思い出、故郷への誇りが徐々に後世に伝わるのが難しくなってしまうのではないかと考えた。そこで、主役である大熊町の人々が住民同士、他の地域の方々や大熊町の思い出を語り合うというギャラリーをつくることで、たとえ今後故郷の大熊町から離れて生活するようになって、この体験により自分の故郷の思い出話や誇りを後世に語り継ぐことができ、更なるコミュニティ形成とともに故郷の思い出が残り続けることができるのではと考えた。

研究のプロセス



○現地調査

扇町1号公園仮設住宅を1月末までお借りし、現地調査とゼミ活動を行った。実際に仮設住宅の中で作業をすることで仮設住宅に入居されている方々の現在の生活や様子が身近に感じることができた。作業をしている最中に周辺の方々がお声をかけてくれたり、いろいろなものを差し入れに持ってきてくれたりと、住民の優しさやコミュニティについて肌で感じる事が出来た。

○ヒアリング調査

9月と11月にヒアリング調査を行った。最初は仮設住宅に入居されている方々の生活環境について調査を行い、震災以前のご職業や空き家の現状、生活に困っていることなどをお聞きすることが出来た。また大熊町の方々は故郷の思い出についてお話を聞くことができ、住民の郷土愛を感じることが出来た。次に11月は故郷の思い出や大熊町の誇りについて調査をした。大熊町での生活や行事についてのお話を聞くことができ、その当時の写真もお借りすることが出来た。

成果物

◇ ギャラリー企画提案

■ 展示テーマ

『私たちは語りビト ～大熊町を語り伝えていくために～』会場:扇町一号公園仮設住宅集会所

■ 特徴

- ・仮設住宅に入居されている方々から大熊町に関する写真をお借りして、展示をする。
- ・大熊町の風景や行事の展示物を見て、大熊町の思い出話を語り合ってもらう。このような体験をすることで故郷の誇りや素晴らしさ、思い出について改めて認識することができ、自分が過ごしてきた故郷を後世に語り伝えていくことが出来ると考えている。

◇ 仮設住宅に風よけ、雪よけを設置

- ・ヒアリング調査によって風雪対策の要望があることが分かった。仮設住宅に入居されている方に協力をしてもらい、風雪対策のため、風よけ、雪よけを新たに設置した。風除室前に囲いスペースを確保することで、天候などを気にすることなく、世間話をする事ができ、快適にコミュニティがとれるような場所を制作した。



風よけ、雪よけ設置の様子



ギャラリー展示用のパネル

考察

この研究を通して、震災から3年以上が経った現在でもまだ故郷に戻る目途が立っていない地域があるという現状を知ることができ、まだ復興には時間がかかることが改めて分かった。また実際に仮設住宅をお借りしたことで今まで知ることが出来なかった仮設住宅の問題や生活について貴重な体験することが出来たのは良い経験となった。実際に仮設住宅で過ごしている方々と交流することができ、改めて住民との絆や優しさがコミュニティ形成について重要なことであると感じ、これらをさらに改善して良いコミュニティ形成ができるようにしていかなければいけないと感じた。この研究によって、今後仮設住宅で故郷の思い出などを語り合うギャラリーが生まれてくると良いと考えた。